近くの工場に運ぶ大型船や、漁船、客船、各種の船が無秩序な運航のため交通規正は急かれている。船から上る客待ちの車の列が最近ひどくなり、それが為め整理員を高い給料で傭っている始末である。

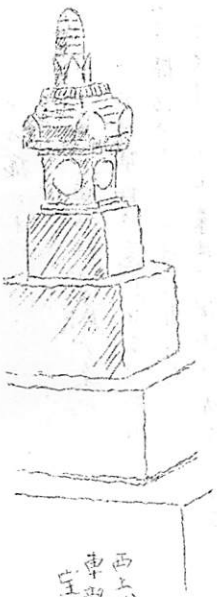
乗り物の数が多くなり、大型化となり、スピード化されてきた。葛港は広いスペースが欲しい。又急市場附近は埋立の必要にせまられている。県営上屋附近に移転してはどうかという声もある。しかし葛浦にかゝえられた自然の防壁を持つ土地から、地元の人々は移転すること は承知しまい。将来冷凍業は進んでも、佐伯周辺の漁獲高は伸び見込てたものではないと云う。

以上は葛地域の人々の声である。佐伯港発祥の地葛は、佐伯港全体の改革の中にどうあるべきかを問われる時期にきた。

大企業と小企業、為政者と地域住民。各職種内の関係。大企業につきものの公害、そして個人権利の主張。之等は全国いたる所におきている問題である。

私達は住民の意見を聞き、確かな資料を参考にして、地域エゴを捨て、将来も見通し、広い視野に立って、みんなの知恵で今の時点でえられる最善の方法を、勇気をもって施策する以外になさそうである。将来は又将来の人が最善と思われる方法をとってくれることを信じているからそう思うのである。

（つづく）



西上浦地区
東野浦の
宝篋印塔

記録

再び大野郷の文化財を探る

―大神惟勝の墓などをたずねて―

会員　高木嘉吉

八月十七日、吉藤田さんに案内してもらって、標記の探訪を行った。大野郷と言っても大飼町、千歳村、大野町の東部方面で、あまり人に知られず、山陰にそっとある文化財といったものが多かった。

以下概要を記して参考に供したい。

大飼町山内の板碑

高さ一五六糎、幅一二四糎、厚さ二〇糎の見事な板碑である。

正面上部に二つの梵字が刻まれている外は何の記銘もない。岩掛忠夫氏の所有地内にあり、同氏が祀っている。土地の人は石舟様と称し碑石と石舟と見立てて、祀られお堂が石舟に乗って当所に飛来したとして尊崇している由である。

岩掛氏に会って色々尋ねたが、何を祀ったか不明である。

大野町長畑の磨崖石佛

磨崖石佛が十体、長つぼりと木陰に坐っている。像は高さ六八十糎で大きくはないが、十体横に一列に並んだ姿は親しみ深いものがある。筆者不勉強でどれが何仏であるか明らかにも得なかったが、土地の人の信仰が厚いらしく、仏前に香が焚かれてあった。

吉祥寺の跡とかで、宝篋印塔、大乗妙典塔各一基が、

昔を語るかの様に建っている。

大野町中道の城井氏の墓地

ここに大神惟勝の墓がある、訪ねてみようというのが今回の探訪のきっかけであった。

こじんまりした墓地に沢山の碑石が立並ぶ中に、訪ねる墓は堂々と立っていた。徳石の高さ一米余、正面に「城井越前守大神惟勝墓」　裏面は墓碑改築の由来書で、文政八年（一八二五）五月八月二十四日改築のことを記し、向って左側面に「後德院節山道義居士」の法号と、明德二年（一三九一）辛未八月二十四日卒の日附け、右側面には建設者遠孫　惟德、惟定、惟時、惟平、惟旭、惟堯の名が刻まれている。

墓地に程近い城井重行氏の宅を訪ね、夫人から色々話をうかがう。話の要点は次の様であった。城井氏の本家として墓の管理に当っている。五月二十四日に城井一族が集って、墓前祭をしている。墓地の掃除は近所に住む城井姓四軒でしている。残念ながら系図等の書類はない。守佐に城井の本家ありと聞いているが調べていない。

毋年礼城に関係のある佐伯惟勝は、はっきりしない点の多い謎の人物であるが、関係記録から推察すると、惟勝は、十代惟治の兄惟信の子で、十一代惟常の兄である。惟勝、惟常は兄弟ながら不和で私闘を繰り返し、惟常は遂に佐伯を去って筑後来御に居住した。惟治没落の後、大友義鑑は惟常の武勇を惜しみ、召し返して佐伯氏を継がせることにした。しかし当時は惟勝が毋年礼に拠っていたので佐伯に帰ることが出来ず、木付を賜わって居住していた。

天文十三年（一五四四）杉佃親尚の叛乱が起るや、惟常は木付から府内に馳けつけ、親尚の拠った高崎山を攻めて軍功をたてた。其の後間もなく惟常は佐伯に帰り、本領を安堵したわけであるが、それは惟勝が死亡したためと思われる。とすれば惟勝は惟治の没落から天文十三年頃まで約十八年余佐伯地方を治めていたものであろう。惟勝の没年、没所等はっきりしないが、天文十三年以後に病死か傷害死か、或は佐伯を去って姿を消した人物であろう。前記の城井越前守大神惟勝とは同一人物とは考えられないが、同姓同名は奇しきことである。城井氏が紋章に三つ巴を用いていること、他の人物も名前に惟の字をつけていること、大神姓を称していること等から、大神惟勝は佐伯の系統に関係のある人々ではないかと推察される。

以上素描をおけて同好の士の研究を待つ次第である。

千歳村　柴山八幡社

郷人の尊崇の篤い八幡社である。参道入口に天空高く聳え立つ大杉は、まことに壮観である。古藤田さんと測って見たら根の高さの周が九米三〇糎あった。

千歳村　大迫の石仏

訪れる人も少ない静かな山陰に、巨大な石仏が静坐している。磨崖仏であるが、細部は粘土で細工して造形している。石仏の上に覆屋が出来て風雨を防いでいるのは心嬉しいことである。

野津町　西神野

帰途まだ日が高かったので標記を訪れることにした。風連鐘乳洞から羊腸の山径をたどって、車は難行を重ねた。

一カ所にまとまった村落があるのかと想っていたが、

熊野神社まで起伏の多い山径に沿つて、広い範囲にわたつて、五戸、十戸と人家が散在して西神野の里を形作つている。

実地を踏破して確めることは我々の研究の基本的態度であるが、ここでもその必要を痛感した。

有名な熊野神社は部落の東のはずれ、清流を眼下にした景勝の地にある。途中で行き合つた何人かの子供が、それぞれに平和な里の生活を楽しんでいる姿が印象的であつた。

何の用意もない探訪であつたが、平家の落人が隠れ住んだと伝えられる此の里は、振り下げた色々な歴史を秘めているであろうと、感慨を新にして辞去した。

（おわり）

（十六ページより つづき）

五町、はい五町。岸深く潮入満干かまびすしく、何風にても不善。船懸り吉。但、湊の入口、南ミ巳に向へば、波高く大風に分入不成。湊之口、辰巳に向へば、沖に嶋有。湊の口より嶋の間拾五町。此島、西の方に瀬底あり。城下より海上拾参里。是より有馬左衛門佐領分。日吉之内、ちがた嶋之浦ノ湊迄、海上五里。

（原、現在の延岡市）

× × × × ×

なお毛利家世代の幼名、通称を列記しておきます。

初代 高政（勘八郎）　二代 高成（勘八郎）
三代 高尚（市三郎）　四代 高重（主馬）
五代 高久（数負）　六代 高慶（千代熊又助十郎）
七代 高丘（寅太郎）　八代 高標（斉三郎）
九代 高誠（岩之助）　十代 高輔（栄菊・栄之助）
十代 高恭（岩之助）　十二代 高謙（栄三郎・岩之助）
十三代 高範（侃次郎）

（以上）

弥生町指定文化財の公示

弥生町文化財調査委員
佐伯史談会 会員　伊賀 重雄

弥生町は文化財指定公示を、去る九月七日に決定致しました。佐伯市南部では本匠村に続いての指定であり、文化財保護の上から意義あるものと信じます。

佐伯地方の文化財保護は、白杵、宇佐、国東、竹田、日田等の県下文化財保護の先進地に較べ、その文化財行政に大きな格差があることは残念でならない。

佐伯地方の中心は何んと云つても佐伯市で、佐伯市が本腰に文化財行政に乗り出してこそ、今般指定された弥生町の文化財も脈絡的に存在価値が出来るものと信じます。

今回指定された物件は地域的なもので、文書は他方文書が主で、徳川時代の下部組織の研究に役立つものと思う。史跡に指定の栂牟礼城址は佐伯市との境界にあり、この指定については佐伯市と協力して史跡保護を考えたい。又厳島神社は佐伯和紙の唯一の継承者市原氏を指定したことも意義あるもの、その生産の感能は何とも云えぬ。

出来るだけ伝承して欲しいものです。

今回は初指定で、これから末永いものと所政から見つけて研究解明したいと思っています。

弥生町
指定文化財 一覧

文書	出
	御
	佐
	御
	と
	常
	小
古文書	西
	授
	天
	金
	桑
	常
	鰐
石造物	佐
	字
	赤
	栂
	上
史跡	小

（以上）